

水稻の斑点米カメムシ類(アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ等)の発生状況と防除対策について

1 発生状況

(1) 7月13日～14日の雑草地等での20回すくい取り調査では、すくい取り虫数は73.7頭(平年48.5頭)で平年に比べやや多かった。

特に、斑点米発生の主原因となるアカスジカスミカメは52.0頭(平年25.9頭)で平年に比べ多く、クモヘリカメムシは16.5頭(平年12.2頭)で平年に比べやや多かった。

(2) 県内4か所の予察灯における6月1日～7月10日の誘殺数は396頭(平年329頭)で平年に比べやや多かった(図2)。

2 今後の予想

- (1) 発生地域 県内全域
(主に8月上旬までに出穂する水稻を作付けしている地域)
- (2) 発生時期 出穂期以降
- (3) 発生程度 やや多

3 防除対策(防除時期等)

(1) 畦畔、休耕地等の草刈り

ア 畦畔等の草刈りを実施し、出穂期以降もイネ科雑草(エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等)の穂が出ないように管理する。

イ 水稻の出穂2週間前以降に畦畔等の草刈りを行うとカメムシ類が水田に移動することがあるので、草刈りはそれまでに行う。

(2) 薬剤防除

ア 8月上旬までに出穂するほ場では、穂揃期と穂揃期後7日目の2回の薬剤防除を徹底する。

イ 8月中旬以降に出穂するほ場では、穂揃期の防除を徹底し、その後もクモヘリカメムシ、ミアナミアオカメムシ等大型のカメムシ類が認められるほ場では、穂揃期7日後の防除を行う。

4 防除上注意すべき事項

(1) 本年の水稻の生育は概ね平年並みであるが、ほ場の出穂時期をよく確認し草刈り時期及び防除時期を逃さないようにする。

(2) 粒剤はアカスジカスミカメ等小型のカメムシ類には効果があるが、クモヘリカメムシ等大型のカメムシ類には効果が低い。粒剤の防除は出穂期に行い、遅れないようにする。

(3) 周囲よりも出穂の早いほ場、休耕地や雑草地周辺のほ場はカメムシ類による被害が多くなるので防除を徹底する。

- (4) カメムシ類は広範囲に移動するので、広域で一斉防除すると効果が高い。
- (5) 防除時期に畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は、畦畔も含めて防除を実施する。

(参考)用語解説

出穂期とは、出穂すると思われる全茎数の40～50%が出穂した日

穂揃期とは、出穂すると思われる全茎数の80～90%が出穂した日



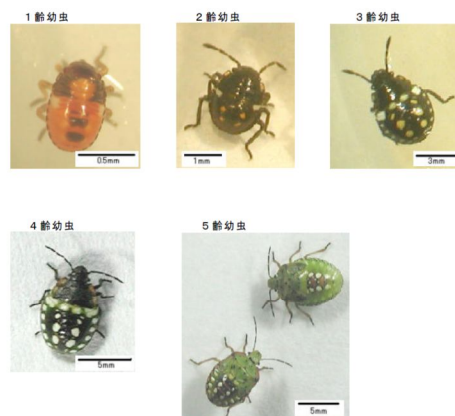
写真1 クモヘリカメムシ



写真2 アカスジカスミカメ

ミナミアオカメムシ

成虫（左：緑色型、右：緑色・白色帯型）



トビロウンカの長期予報について

1 予報内容

- (1) 対象地域 県内全域
- (2) 今後の予測
 - ア 過去の発生データを利用した解析方法による予測結果では、「少発生型」になる確率が高い。
 - イ 本年は8月の早い時期から坪枯れが発生する可能性は低いと予測される。その後も、坪枯れは少なく局所的な発生にとどまると予測される。

2 防除対策

- (1) 本年は発生密度が低く、このまま推移すれば防除の必要性は低い。ただし、第1世代幼虫最盛期(7月26日頃まで)にはほ場で発生密度を確認のうえ、防除の目安を超えるほ場は直ちに防除を実施する。
- (2) 防除適期
7月26日頃まで(第1世代幼虫最盛期)
- (3) 防除の目安
100株当たり20頭以上(成幼虫)
- (4) ほ場を確認する際にはセジロウンカ、ヒメトビウンカと見誤らないようにする。

3 発生状況

- (1) 7月中旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年2.1%)、10株当たり虫数は0頭(平年0.012頭)で平年に比べやや少なかった。
- (2) 飛来日は、6月25日(少)頃と推測された。
- (3) 予察灯での誘殺数(4か所、5月11日～7月13日)は、0頭(平年24.3頭)で平年に比べやや少なかった。



写真1 トビロウンカ成虫



写真2 トビロウンカ幼虫